

# 港北区災害ボランティア連絡会ニュース

事務局 〒222-0032 横浜市港北区大豆戸 13-1 吉田ビル 206 港北区社会福祉協議会

第 15 号

TEL 045-547-2324 FAX045-531-9561 E-mail info@kouhoku-saibora.net

2013 年 12 月

HP <http://www.kouhoku-saibora.net>

入会は随時受け付けています。あなたの町の防災度を高めるにお力を貸して下さい。

## 新しい年を迎えて

港北区災害ボランティア連絡会  
会長 井上禮子

新年明けましておめでとう御座います。お健やかに新しい年をお迎えになられた事と思います。

ここ近年世界で異常気象による災害が多発しております。日本も然りです。災害ボランティアセンターの重要性がますます増してまいりました。私も仙台、浦安と訪れてまいり、被害の状況を見てまいりました。

港北災害ボランティア連絡会には、25年に数多くの方が会員になって下さいました。ニュースが毎月発行され、タスクチームも出来、活発に活動しております。今年はもっともっと活動できるのでは無いかと期待しております。

今年こそ役所と協定をきちんと決めて行きたいと思います。今年度も後僅かになりました。寒さも一段と深まります。体に気をつけながら皆さんと一緒に頑張りたいと思います。

## 災害ボランティアセンター運営シミュレーションの報告

災害時、港北区福祉活動拠点に災害ボランティアセンターが設置されると想定してのシミュレーションが平成 25 年 12 月 7 日(土)9:00~15:00に行われました。一般参加者 15 名を含めた 29 名の参加者は昼食をはさんでの長時間の訓練となりましたが皆さん積極的に動いていました。

主旨説明・ボランティアセンターの説明・自己紹介の後被害想定を確認し、グループに分かれて災害時にどのようなニーズが出てくるのか考えました。さらに被災者役・センター役に分かれニーズ聞き取りの実習を行いました。準備されたニーズ票に基づき聞き取りを行い記入していきましたが、正確に情報を収集するテクニックの必要性を感じました。

その後は全体がボランティア・コーディネーターに分かれて、本番さながらにボランティアの受付・登録、朝礼(ボランティアの募集)、送り出し、活動後

のフォローという流れを交代で体験しました。

実習終了後の意見交換で



も貴重な意見が出されました。今回様々な帳票をタスクで相談し準備しましたが、実際に使ってみるとまだまだ改善の余地があり、さらにどう変えていけばよいかという意見も参加者から頂きました。ボランティアセンター設置の姿が現実的になり、ハード面・ソフト面での不足が何かということが形としてはっきりしてきたと思います。さらに訓練を重ね、また多くの方がシミュレーションに参加することにより災害時のセンター運営がスムーズにできると思います。(坂上)

### ●災害ボランティアセミナーのご案内●

東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県七ヶ浜町でボランティアセンターを運営した社会福祉協議会職員を講師に課題や問題点を伺ったあと、参加者とのパネルディスカッションを通して、今一度「災害ボランティア」について考えてみます。

【日 時】2月1日(土) 10:00~15:00

【会 場】港北区社会福祉保健活動拠点多目的研修室

【内 容】午前中 講演 星真由美氏

(浜を元気に！七ヶ浜町復興支援ボランティアセンター ボランティアコーディネーター)

午後 パネルディスカッション コーディネーター 一原 美紀

【参加費】500円(資料・保険・昼食代)

【定 員】50名(応募多数の場合は抽選)

\*手話通訳付き。保育あり(要予約)

\*申し込み方法 (下記の①もしくは②にて)

①港北区社会福祉協議会(電話:547-2324)

②災害ボランティア連絡会ホームページより

## 12月定例会報告 第8回定例会

平成25年12月18日(水) AM10:00～  
港北区福祉保健活動拠点多目的研修室  
出席者：井上会長(港北区ボラ連)、白井副  
会長(個人)、富士塚ボランティアグループ、国  
際救急法研究所、港北区地域子育て支援拠点どろ  
っぷ、国際交流ラウンジ、手話サークル梅の会、  
仲手原マザークラブ、個人8名、小野(区社協)、  
萩生田、倉橋(港北区役所地域振興課)、事務  
局 片桐、山本、(区社協) (敬称略)  
司会=白井副会長 記録=和田 合計20名 討  
議内容

### 1 港北区防災計画(震災対策)について

横浜市の改訂にあわせて港北区は9月1日から  
新しい防災計画で運用を始めている

○被害想定が変わった(元禄型関東地震)

○医療体制が変わった 医療救護隊(医師・歯科  
医師・薬剤師・看護師等)が参集して応急医療を  
行う

○帰宅困難者対策に力を入れる

○ボランティア関係は変更なし

### 2 各タスクより

#### ◇シミュレーション

防災に意識の高い方の参加が多かったので内  
容の濃いシミュレーションができた。

#### ◇セミナー

2月1日のセミナーの講師=東日本大震災で経  
験され災害ボランティアに携わっていた宮城県  
の七ヶ浜社会福祉協議会職員の星様に決定しま  
した。

#### ◇PR

PRはタスクだけでは活動しきれないので会  
員の皆さんに参加お願いしたい。

情報を地域拠点の関係者に上手く繋げたい

### 3 その他

メーリングリスト不要の方ははずす

県スキルアップ講習会1月15日～1月22日

以上

## 港北区新防災計画を読む

横浜市は2013年3月市防災対策の震災対策  
編を改訂しました。それを受けて各区も修正を行  
っています。その中では「減災」をキーワードに、  
「自助」「共助」が強調されています。また新横浜  
駅を抱えた港北区として「帰宅困難者対策」を課  
題としています。どれも防災ボランティアとして

は重要な点です。当日の質問を中心に新防災計画  
を見てみることにします。

冒頭には市が作成した防災憲章があります。

## よこはま地震防災市民憲章

### ～私たちの命は私たちで守る～

ここ横浜は、かつて関東大震災に見舞われ、多  
くの方が犠牲になりました。大地震は必ずやっ  
てきます。その時、行政からの支援はすぐには届  
きません。私たち横浜市民はそれぞれが持つ市  
民力を発揮し、一人ひとりの備えと地域の絆で大  
地震を乗り越えるため、ここに憲章を定めます。

穏やかな日常。それを一瞬にして破壊する大地  
震。大地震はいつも突然やって来る。今日かもし  
れないし、明日かもしれない。

だから、私は自分に問いかける。地震への備えは  
十分だろうか。

大地震で生死を分けるのは、運・不運だけでは  
ない。また、自分で自分を守れない人がいること  
も忘れてはならない。私は、私自身と周りの大切  
な人たちの命を守りたい。

だから、私は考える。今、地震が起きたら、どう  
行動しようかと。

不安の中の避難生活。けれどみんなが少しづつ  
我慢し、みんなが力を合わせれば必ず乗り越えら  
れる。だから、私は自分に言い聞かせる。周りの  
ためにできることが私にも必ずあると。

東日本大震災から、私たちは多くのことを学ん  
だ。頼みの行政も被災する。大地震から命を守り、  
困難を乗り越えるのは私たち自身。多くの犠牲の  
ためにも、このことを風化させてはならない。  
だから、私は次世代に伝える。自助、共助の大切  
さを。

今回の防災計画は、行動指針として市民が支え  
合って行くことを求めています。何から何まで行  
政に頼ることはできないことを市民が知ることは  
大切です。(Pは区防災計画のページを表す)

### 1 行政、市民のやるべきこと (P6)

#### ◎ 行政の責務=公助の範囲

区民の生命、身体、財産を震災から保護するた  
め、その組織及び機能を挙げて震災対策を講ずる  
とともに、区民の自主防災組織の充実を図る。

#### ◎ 区民の責務=自助・共助の強調

建物の耐震化、家具の転倒防止、最低三日分の  
備蓄、トイレパック、医薬品の準備をするととも  
に、防災訓練等に積極的に参加すること。

地域の助け合いを大切に、地域で要援護者を支えること。

## 2 災害ボランティアの位置づけ

一般ボランティアの受け入れ、調整は社協等と災害ボランティアネットワークが行うため、平常時から顔の見える関係作りを推進する。(P17)

地域防災拠点とは平時は地域のボランティア団体との連携をすすめ、発災時には災害ボラセンと連絡を取り合う。(P19)

発災時は区の「ボランティア班」が情報提供や連絡調整を行う。(P27)

設置場所は区社協を予定する。(P17)

とあります。

区役所や区社協は港北区の南西端に位置するため、また対震度への不安からもここだけで良いのかの検討を進める必要があり、将来はサテライトセンターも含めた訓練が必要でしょう。

またボランティア班は発災後にできる組織ですから、平常は区防災担当者との対話を進めることが大切です。

## 3 要援護者対策 (P20、41)

地域での解決が求められながら、難題として残るものです。区は災害時要援護者名簿を作成・保管し地域が希望する場合は協定との手続きを経て提供する。

とあるものの、本人が希望する手挙げ方式ではなかなか登録が進んでいない実態は未解決です。当事者団体も含む当連絡会がリードすべき課題かも知れません。その前提としては、登録するとどんな利点があるのかを知らせることでしょう。

また福祉避難所の設置は、拠点に一旦避難してもらい、そこで福祉避難所が必要な人数を把握した上で開設を決め、割り振るとの説明ですが、膨大な事務量が発生する災害時には出来るだけ簡単な仕組みが必要です。避難行動がこのような方々にどれだけ負担になるかは前号紹介の「避難弱者」でよくわかります。ここはもう一工夫欲しいところです。

## 4 拠点の役割(P19)

地域住民は何かあったら拠点に行けば良い、と考えているようです。しかし拠点の収容力には限界があります。また自宅避難の方が良い場合もあります。しかしライフラインが途絶え、情報も途絶するような場合は不安もあり、拠点にすぎるとは十分に考えられます。そのため拠点には情報提供や物資配布の機能があることが説明されました。そこを十分説明することと、自助で強調されている自宅で暮らせる対策(耐震補強や転倒防止、

備蓄など)を各自が進めることが大都市住民に求められています。

港北区の人口33万人強は盛岡市、水戸市、那覇市など全国殆どの県庁所在都市よりも多いのです。この膨大な人口が被災者となる大変さをしっかりと認識することが必要です。

## 4 帰宅困難者対策(P53)

区内には東横線、横浜線、新幹線、市営地下鉄が走り、また新横浜は横浜市の副都心的な発展とアリーナやスタジアムという大勢が集まる施設もあります。結果大勢の帰宅困難者を抱える可能性があります。3、11の反省から行政と施設者が対応を進めていますが、個人レベルでの対策(帰宅方法や時期を家族と確認する、行動できる準備をしておく、など)は必須でしょう。

連絡会メンバーがまずは見本を示しておくと思いいます。

## 5 連絡方法 (P9)

個人、災害ボランティア、行政、どのレベルでも災害時に最も大切な問題です。家族の安否が確認できなければボランティアセンターに参集することも出来ませんね。ボラセンと区や各拠点との連絡はどうするのか。複数の手段を確保し、使える技術を持つておくことが必須です。

### ○防災とボランティアのつどい

日時：平成26年1月25日(土) 10:00~16:30

会場：TKPガーデンシティー竹橋(地下鉄東西線竹橋)

『防災ボランティア活動、次のステージに向けて』

○コーディネーター

鍵屋一(特定非営利活動法人 東京いのちのポータルサイト 副理事長、板橋区議会事務局長)

○パネリスト(五十音順)

兼田奈津子(特定非営利活動法人 さくらネット)

長沢恵美子(一般社団法人 経団連事業サービス 総合企画・事業支援室長)

福田信章(東京災害ボランティアネットワーク 事務局長)

山本隆(一般社団法人 ピースポート災害ボランティアセンター 代表理事)

13:00- ワークショップ

グループ1「被災地を支える」

グループ2「防災の担い手を育む」

グループ3「多様な主体がつながる」

少人数のグループにわかれて、ワールドカフェ形式で「防災ボランティア活動の次のステージに向けた取組、アイデア」について参加者同士で話し合います。

16:30 閉会

主催：内閣府(防災担当) 参加費無料

## 大震災に学ぶ あなたと私をつなぐ

### ちから—災害時要援護者について考える—

区セーフティーネット主催の防災講演会が12月11日にあり、南相馬市で施設を運営し続けている青田さんの講演がありました。

#### 「お互いさま」の気風を

11月に「逃げ遅れる人々」上映会のお手伝いをしたおかげで、3年前の東日本大震災・福島原発大破により、障がい当事者・関わりの方々がとりわけきつ状況に置かれてきたことが少しわかりました。今回NPOサポートセンターぴあの青田由幸さんのお話で、大災害時の具体的な困難さをさらに身に迫って感じとることができました。申し訳ないことですが、明日の我が身を見せていただいた気持ちです。

前号で書かれているように、災害時にも共に生きることを実現するには普段の暮らしで共に生きることを実現することが核心なんですね。しかも極めて狭い範囲での具体的な関わりが大切なんですね。

港北区や青木さんのお話にあった災害時要援護者リストの「活用」は、この核心とびたりと重なる問題だと思いました。私の住むマンションでは、災害時安否確認訓練が始まり、交流活動がさらに強まっています。一昨日にははずぐそばの公園にある町内会の防災備蓄品内覧会が開催されました。みなさんががんばっています。おたがいさまの気風が強まっていると感じます。援護者リストの問題でいえば、キーポイントは「お互いさま」の気風を共有し、またどんな小さなことであれ要援護者自身が周りに向かって何らかの前向きな関わりを発していくことであるように思いました。

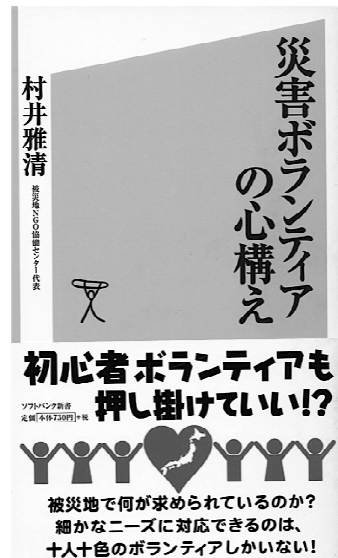
入江勝通 (大豆戸町在住)

### 役に立つ災害本

#### 災害ボランティアの心構え

村井雅清著 ソフトバンク新書

阪神・淡路大震災の際チビクロ救援グループで活躍したあと、被災地協働センターの代表として、またCODE(海外災害援助市民センター)事務局長、また震災がつなぐ全国ネットワーク代表として国内外の数多くの災害現場に立った経験からの多くの示唆に富む文章が載っています。



「よく災害後の被災者ニーズに、水や食料や布団や衣類といったものが挙げられるが、それは厳密に言えばニーズではない。もっと言うと、避難所の間仕切りや炊き出しの調理施設もニーズではない。どれも提供されて当たり前のもだからだ。被災者が本来持つ

ている可能性を発揮するために必要なもの、それが本当のニーズであり、それらを提供することこそが被災者自立支援だ。」という文章に彼の現場経験に基づくボランティアのあり方が集約されています。それを端的に表す言葉が「ボランティアは何でもありや」であり、「行政に頼まれてもやらない、行政に言われなくてもやる」でしょう。

またボランティアが大勢来てそれをうまくコーディネートできなかった、との言説に対しても当時の神戸にいたものとしての反論をしています。本書には、「ボランティアは押し掛けて良い」「ボランティアセンターは機能するか」「一人ひとりがコーディネーター」「ミーティングに出ないボランティア」といった刺激的な見出しが並んでいます。どうということなのかは読んでみてのお楽しみです。

被災地の施設の職員が「行政の冷たい平等ではなく、ボランティアの温かい不平等を」と語った言葉とも通じる、実際に活動し続けて来た経験に裏打ちされたボランティア論です。

ちょっといやらしい書名は著者の本意ではないでしょう。(宇田川)

#### 編集後記

- ☆ ボランティア元年と言われた阪神淡路大震災から19年目を迎えます。神戸を訪ねると震災復興の難しさを感じます。(宇田川)
- ☆ 被災地より年賀状が届きました。お元気で復興に向けて頑張っておられるようで安心しました(山本)
- ☆ 年末年始はあまちゃんのロケ地の北三陸に行ってきました。復興にはまだ課題がありますが、そこには元気な被災地の姿がありました。(野田)
- ☆ 年末年始いかがお過ごしでしたか。初めて鎌倉七福神巡りに出かけて、あまりの人出の多さに驚き、ヘトヘトになってしまいました。(山口)